

# 園芸タイムリー情報

## 《5月中・下旬版》

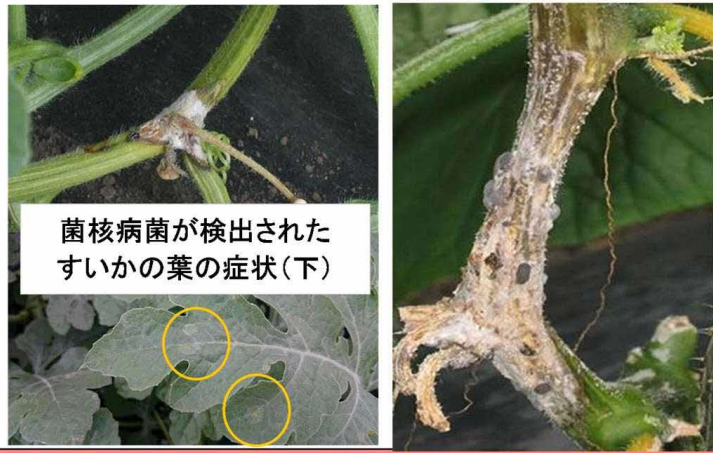
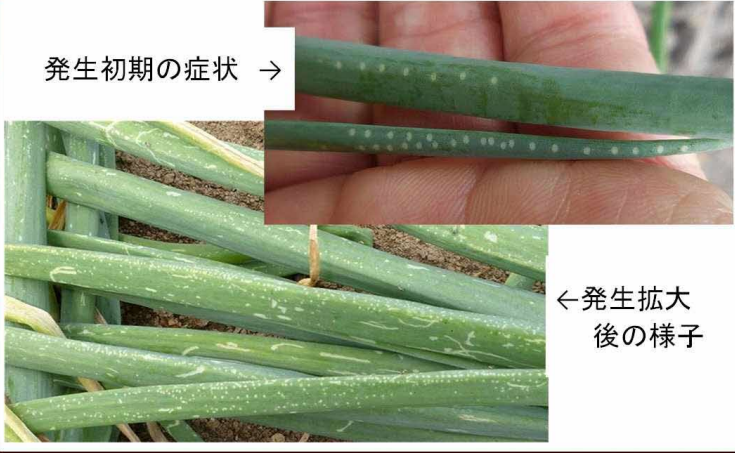
令和3年 5月18日発行 第1号  
 上川農業改良普及センター  
 Tel : 0166-84-2017 Fax : 0166-84-2009  
 E-mail : asahi-nokai.11@pref.hokkaido.lg.jp  
 HomePage : http://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/nkc/index.htm

### 全作物共通

天気は数日周期で変わり、気温は平年並～高い見込みです。



- ①日中急激にハウス内温度が上昇することがあります。高温障害や生理障害が助長されますので、換気を十分に行うとともに、換気時間に注意し、夜間の温度が確保できるようにしましょう。
- ②低温が予測される場合は、ハウスやトンネルを早めに閉めるなど、作物の生育適温を確保しましょう。
- ③ほ場の土壌改良や施肥は、土壌診断結果に基づき適正に実施しましょう。
- ④ほ場が過湿状態での無理な機械作業は、土壌の透・排水性を低下させることから、ほ場を十分に乾燥させ、碎土性が高まるように作業を行いましょう。



※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。



作物名	すいか・メロン	作物名	たまねぎ
病虫害 生理障害名	 <p>菌核病菌が検出されたすいかの葉の症状(下)</p>	病虫害 生理障害名	 <p>発生初期の症状 →</p> <p>←発生拡大後の様子</p>
菌核病		ネギハモグリバエ	
発生状況		発生状況	
発生に注意		発生に注意	
発生時期		発生時期	
—	5月下旬～		
発生の状況・要因		発生の状況・要因	
<ul style="list-style-type: none"> <li>つるの分岐部や果実の花落ち部に白色のかび（菌糸）を生じて腐敗し黒色の菌核を形成する。</li> <li>20℃前後の比較的低温が続く、多湿の場合に発生が多くなる。</li> <li>すいかやメロンでは、着果期を過ぎ茎葉が繁茂したハウスで発生が多くなる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回目の発生は5月下旬頃からとなる。</li> <li>発生初期は葉身に縦並びの白色小斑点（写真上）を生じる（食痕・産卵痕など）。</li> <li>幼虫がふ化し、白色すじ状の食害が拡大する（写真下）。</li> <li>葉数の少ない株では著しい生育不良や枯死株が発生する。</li> </ul>	
対 策		対 策	
<ul style="list-style-type: none"> <li>換気を心がけ、ハウス内湿度の低下に努める。</li> <li>着果期前より予防防除を実施する。</li> <li>被害茎葉・果実は見つけしだい除去し、ほ場外へ搬出する。</li> </ul> <p>&lt;防除の一例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●スミレックス水和剤               <ul style="list-style-type: none"> <li>すいか 1,000～2,000倍 収穫7日前まで 5回以内</li> <li>メロン 2,000倍 収穫前日まで 3回以内</li> </ul> </li> <li>※スミレックスくん煙顆粒は、メロンには登録がなく使用できません。</li> <li>●カンタスドライフロアブル               <ul style="list-style-type: none"> <li>すいか・メロン：1,000～1,500倍 収穫前日まで 3回以内</li> </ul> </li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>白い線状の幼虫被害が発生してからでは、防除効果が得られにくい。</li> <li>5月中旬から成虫の食痕を観察し、食痕を観察したら速やかに薬剤防除を行う。</li> <li>葉身部全体に薬液が付着するよう、展着剤を加用する。</li> </ul> <p>&lt;防除の一例&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●リーフガード顆粒水和剤 1,500倍 収穫 3日前まで 3回以内</li> <li>●ベネビアOD 2,000倍 収穫14日前まで 3回以内</li> <li>※ いずれの薬剤も展着剤を加用する（まくぴか 5,000倍）。</li> </ul>	



作物名	あぶらな科野菜全般	
病虫害生理障害名	コナガ成虫	
コナガ		
発生状況		
発生に注意		
発生時期	コナガ幼虫	
5月下旬～	幼虫による葉の被害	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> <li>幼虫が葉裏に潜み、葉の表皮を残して食害する。</li> <li>比布町では4月12日（平年比7日早）に成虫の初発が確認されたため、今後は幼虫の発生に注意が必要である。</li> <li>全道的に成虫の初発は平年より1～2週間程度早い。</li> </ul>		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> <li>ほ場内外の雑草をこまめに除草する。</li> <li>防虫ネット（目合い1.0mm）を、侵入口となる隙間を作らないように設置する。</li> <li>品目により薬剤の登録内容が違うので、ラベルを確認してから使用する。</li> <li>シアミド系（プレバソフロアブル5等）への薬剤抵抗性個体群の出現があり、防除効果が劣る場合は他系統の薬剤に切り替える。</li> </ul>		

作物名	あぶらな科野菜全般	
病虫害生理障害名	ウスカワマイマイ	
ナメクジ類カタツムリ類		
発生状況		
少発生	チャコウラナメクジ	
発生時期	4月中旬～	
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> <li>4月中旬以降発生を確認しているため、今後も注意が必要。</li> <li>ナメクジ・カタツムリは、ほ場周辺の雑草地、石の下、日陰など暗くて湿気の多い場所を好み、地中で越冬する。</li> <li>葉の食害の他、本体やフンの混入が問題となっている。</li> <li>雨天時や夜間は活発に活動する。</li> </ul>		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> <li>常発ほ場では通気を良くして湿気を逃がす。</li> <li>スラゴを使用する場合は作物周辺あるいは株元の土壌表面に散布し、作物に付着しないように気をつける。</li> </ul>		
<防除の一例>		
●スラゴ 1～5g/m <sup>2</sup> (3.3～16.5g/坪) 発生時		

作物名	トマト・ミニトマト	
病虫害生理障害名	灰色かび病	
発生状況		
発生に注意		
発生時期	がくから感染した発病果実	摘葉は葉柄を残さずに根元から折り取る（右）
5月中旬～		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> <li>発生は見られていないが、予防的な防除が必要である。</li> <li>加温作型のトマトでは、昼夜の温度差で、暖まりにくい果実が結露して発生しやすくなる。</li> <li>夏秋作型のトマトやミニトマトでは、植え傷みで枯れた茎葉から発生しやすい。</li> </ul>		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> <li>花房を覆う葉を摘葉し、日当たりと通気性を確保する。</li> <li>加温作型では、日の出前の加温により急激な温度上昇を防ぐ。</li> <li>植え傷みで枯れた茎葉は、晴天時に枯れた葉を取り除く。</li> <li>葉数が確保されたら下葉を除去して通気性を確保する。</li> </ul>		
<防除の一例>		
予防散布で効果の期待できる剤		
●ダコニール1000 1,000倍 収穫前日まで		
トマト（直径3cm以下を除く）：4回以内、ミニトマト：2回以内		
発生が見られている場合に使用する剤		
●シグナムWDG 2,000倍 収穫前日まで 2回以内		

作物名	トマト・中玉トマト・ミニトマト	
病虫害生理障害名	すすかび病	
発生状況		
発生に注意		
発生時期	すすかび病の葉表の病斑	葉裏のカビ 上：葉かび病 下：すすかび病 (病徴では判別困難)
5月中旬～		
発生の状況・要因		
<ul style="list-style-type: none"> <li>被害残渣で越冬し、次年度の感染源となるため、秋に多発したほ場では、早い時期から発生しやすい。</li> <li>26～28℃の高温で発生しやすく、すすかび病により草勢が低下すると葉かび病やうどんこ病が発生しやすいので注意が必要である。</li> <li>例年、ミニトマトや中玉トマトでの発生が多く見られる。</li> </ul>		
対策		
<ul style="list-style-type: none"> <li>発生後の薬剤防除では抑えづらいので、予防的な防除を心がける。</li> <li>昨年多発したほ場や高温多湿が予想される場合は、初期からの防除が特に重要である。</li> </ul>		
<防除の一例>		
発生前に予防的に散布		
●ダコニール1000 1,000倍 収穫前日まで		
トマト（果形3cm以上） 4回以内、ミニトマト 2回以内		
初発確認後に散布		
●ファンタジスタ顆粒水和剤		
2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内		
●シグナムWDG 2,000倍 収穫前日まで 2回以内		



作物名	ピーマン	
病虫害 生理障害名		
菌核病		
発生状況		
発生に注意		
発生時期	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">茎葉での発生</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">果実での発生 ほ場ではかびが見られないことが多い</div> </div>	
6月上旬～		
<b>発生の状況・要因</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>例年、6月上中旬から7月上旬にかけてと、盆以降に発生が見られる。</li> <li>前年に形成された菌核が土壤中で越冬し、翌年子のう盤を形成して発生源となる。</li> <li>20℃以下の多湿条件で発生しやすく、昼夜の温度差により結露し、分枝基部や果実が長時間濡れていることで助長される。</li> </ul>		
<b>対策</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>多湿が発生の原因となるので、ハウス内の換気に努める。</li> <li>曇天や低温が予想される場合は、灰色かび病と合わせて予防的に薬剤防除を行う。</li> </ul> <p>&lt;防除の一例&gt;菌核病の登録薬剤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ロブラール水和剤 1,000倍 収穫前日まで ※</li> <li>●ロブラールくん煙剤 100g/300～400㎡ (床150～200㎡×高さ2m) 収穫前日まで ※使用回数は水和剤とくん煙剤と合わせて4回以内</li> </ul> <p>&lt;防除の一例&gt;灰色かび病の登録薬剤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●アフェットフロアブル 2,000倍 収穫前日まで 2回以内</li> <li>●スミレックスくん煙顆粒 6g/100㎡ 収穫前日まで 5回以内</li> </ul>		

◆農薬の使用に当たっては、使用基準を必ず守りましょう。  
 なお、品目ごとの栽培防除体系を基に減農薬でクリーンな野菜生産を実践しましょう。  
 ◆防虫ネット・近紫外線カットフィルム・粘着シートなどを活用し、適切な栽培管理と合わせ、病虫害の発生を最小限に抑制しましょう。

※この情報は、上川農業改良普及センター本所地域(旭川市、鷹栖町、当麻町、比布町、愛別町、上川町)向けに作成されています。  
 気象・土壌条件・作業体系から当地域以外には、適用されませんので十分ご注意ください。(不利益・損害などが発生した場合、当方は責任を負うことはできません)  
 ※掲載されている農薬情報は、令和3年5月12日現在の登録内容となっていますので、活用の際は、あらかじめ安全使用基準を確認くださいますようお願いいたします。

■□■□■□■□ GAP手法の活用 □■□■□■□

【食品安全編】

ー栽培に使う水・家畜ふん堆肥の管理ー

- ・使用前に、水の濁りや異臭がないことを確認しましょう。
- ・水が汚染されないように、水路及びその周辺を定期的に点検・整備・清掃しましょう。
- ・堆肥を製造する場合は内部温度を測定し、55℃以上が3日間以上続いている(食中毒を起こす菌対策)ことを確認しましょう。
- ・十分に堆肥化したか、色(褐色～黒色)や臭い(家畜ふんの臭いがほぼなくなる)、手触り(さらさらである)を確認しましょう。